

ネットワークで支えられる相談業務

国保関ヶ原病院医療福祉相談室長
(副看護師長兼社会福祉士) 細田きく子氏

関ヶ原町は岐阜県の西南端に位置し、北は伊吹山脈、南は養老山脈に囲まれ、1600年には、天下分け目の関ヶ原合戦が行われた歴史の町である。人口は年々減少し8,419人(平成22年3月現在)となり、高齢化率は29%である。この地にある関ヶ原病院は148床(うち療養病棟49床)の国保直診の町立病院である。

私はこの病院で看護師として21年間勤務した後、体調を崩したことと社会福祉士の資格を取得したことをきっかけに、8年前、医療福祉相談室を立ち上げ、もう一人の相談員といっしょに勤務している。

立ち上げ当時、もともと看護師として病院内で勤務していた私は、医療について理解できても社会制度についてはまったくわからず、近隣の若いMSWや行政の窓口で電話をかけ、教わりながら仕事をしていました。山間地域にある関ヶ原町は、保健・医療・福祉において、当院を中核とした地域包括支援を推進する保健福祉総合施設「やすらぎ」を併設し、そこで健康増進事業、訪問・通所系の介護サービス事業が行われている。そこで、在宅で過ごす要介護者については、在宅での生活の様子を介護支援専門員や保健師、訪問看護師、訪問介護員に尋ね、協力を得て相談業務を行っていた。現在、このネットワークはさらに強化され、看護師の資格を有する私たち相談員は、医療、療養に関わる支援を担当している。そして、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、役場の窓口で地域の方が相談にこられた場合には、みんなで連携し対応を行っている。相談者や支援者の資源・人材は限られている。しかし、逆に限られた資源のなかで不足するサービスの隙間を埋める支援を、家族も巻き込みながら全員で検討していくため、つねに顔が見える距離にある支援者同士で解決策を見つけることができる。

相談室の仕事は、何年経っても感動する出来事の連続であり、常にドキドキ、ワクワクした毎日を過ごしている。相談室を訪れる患者や家族のなかには泣き出されたり怒り出されたりする人も多い。その患者や家族との関わりのなかで、さまざまな生活や価値観を知り、どの患者も家族も必死で生きておられる様子を目の当たりにする。私たちは、その人たちの思いと生活を大切にしたいと、さまざまな人たちに支援を求め、その患者や家族に向き合っている。そのなかで、問題が解決したときに見せられる笑顔、ホッとする顔が忘れられない。そんな時、いつも私はこんな感動的な場面に出会っていることに感激している。

医療制度改革のなかで、医療も地域完結型に移行され、在院日数も削減されている。患者の入院期間が短くなり医療依存度が高い状態で在宅生活できるようになるには、医療連携がますます重要になる。地域に根ざした病院として住民に信頼されるよう、今後、さらに他職種とのネットワークを強化した活動をしていく必要性を実感している。